式内社・神々の風景

タウンウォッチャー　高垣又太郎（畑）

式内社の密集地域

式内社は『延喜式』（九一七）の神名帳に記録されたわが国の古社であるが、それらの立地点は当時の文化活動の活発な地域の中核をなすものであって、個々の神々はおのおのにその存在意義をもっている。それらはまた時代の推移を反映して神社自体の盛衰を重ねて今日に続いてきたものといえる。二上山を中心とした地域は（図参照）二上山頂から六kmの範囲に十二社を数え、最も分布密度の高い地域になっている。二上山博物館では三つの石の文化としてこの地域の文化成立の源を説明しているが、角度を変えて考えれば、①峠みちと地名、②万葉人の風景、③神々の風景といった三つの面が考えられる。

今日各地に分布するお宮は親しく産土神として精神的にも太い絆で結ばれている。明治四五年（一九一二）に「神社合併反対意見」を書いた異色の博物学者であった南方熊楠は次のように述べている。「神社は、神林が益鳥の保護繁殖、砂防水源涵養や、失火・地震などの非常時のときに役立ち、村民にとっては財産となるばかりではない…略…、かつまた村民の自治の円滑な運営をうながし、慰安を提供しながら人情と愛郷心を養うという形で民心を安定させる。これがまた神社を維持し、したがって土地の防災と生態系の安定を可能にする」と。単にお宮そのもののみでなく、宮を中心とした境域ををも視野に入れていることを重要視したい。

葛木の境域

葛木二上神社（図の1）二上地区は当麻・河内の二上山麓に立地する村々（六六ケ村或は七〇ケ村）を併せて「岳郷」と称し「岳のほり」を催し「岳の権現さん」として親しみ、毎年四月二十三日には春ごととして「歌垣」のように賑いをみせる。葛木の境域は広く金剛山から葛城山そして信貴山頂の「猪上神社」までを範囲とし古代葛城氏の勢力範囲とも考えられるが、この境域は二上山の聖水による生きた暮らしの風景を展開するものといえる。

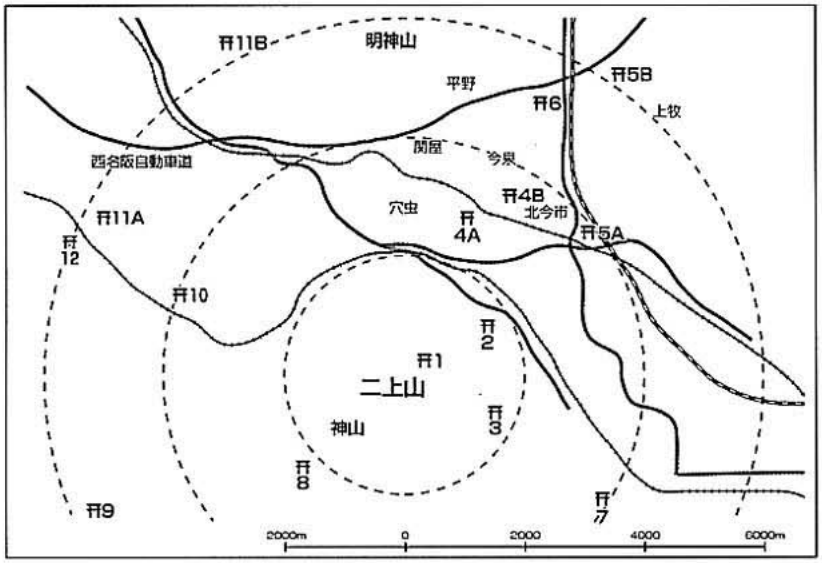
大坂山口神社（図の4A・4B）

その名称は当麻山口とともに大和十四社のうちの二つで、ずばり山口に立地する。大坂・逢坂の地名は「日本書紀」「古事記」にも記され、関所を置き神を祀った宮地であり、二上山を越える広い範囲の領域であり、水を司る神として親しんできた。

志都美神社（図の6）

社伝に「藤原鎌足を祖とする片岡家の鎮守とし、清水神社と称す」とあり、また清水の霊験を伝える伝承がある。祖神として祀られた式内社は渡来人の住んだ地域に立地するものが多いのであるが、図の3は当麻氏、8は蘇我倉山田石川麻呂の故地、9は石川源氏の発祥地といわれ、10は百済混玻王、11は当宗忌寸の祖神を祀る。また片岡は「傍岡」で、いま王寺小学校の北西隅に鎮座する「片岡坐神社」を総社としてこの地域の農水並に生産を司る神でもある。「坐」はイマス、マスの呼称で、図の2は「葛木倭文坐天羽雷命神社」も同様で「倭文」は織物の生産を司りまた片岡の神とともに酒料の稲を献上した神でもある。

深溝神社

「下田の森のお宮」と俗称されてきた下田の鹿嶋神社である。伝承に「常陸国鹿嶋郡に住した相模の武士鎌田氏が鹿嶋明神を勧請した」とあるが、その所在する地は図の5A・5B、いずれにしても地形的には付近を流れる鳥井川・葛下川の流れる深溝の土地で堤防がない。4Bの貫船神社も同様の土地で、罔象女神を祀り、総じて深溝の郷とも称すべく、結鎮座と称する宮座により古くから地域の人々により親しく支えられてきた。

式内社を中心にする地域構造はわが香芝市域では「山口」「傍岡」「下田」の三地域にわけて考えることができるのであって、これらはまた機能的に相互に重複してより一層大きな地域構造をもって拡がるのであって、傍岡・葛城の広がりと歴史をたどることに深い興味を覚えるものである。